

たたき台

鵜川美しい川宣言（案）



鵜川・ピリカ・プロジェクト

～美しい川をめざして～

はじめに ~ プロローグ ~

鶴川は、その源を北海道勇払郡占冠村の狩振岳（標高 1,323m）に発し、占冠村、むかわ町（穂別地区、むかわ地区）の市街地を経て太平洋に注ぐ、幹川流路延長 135km（全国 29 位）、流域面積 1,270km²（全国 52 位）の 1 級河川です。

鶴川は 1 級河川水質ランキングで全国 1 位（平成 17、18 年）にランキングするような全国でも有数の清流であります。この清流鶴川の流域にはシシャモ、サケなどの魚類、サクラソウ、カタクリ、ミズバショウなどの植物、オジロワシ、オオワシ、アオサギなどの鳥類、ニホンザリガニ、エゾサンショウウオなどの多様な生き物が生息するとともに、赤岩青巖峡や福山溪谷といった景勝地やシギ・チドリなどの渡り鳥が飛来する河口干潟があります。

また、アイヌ語に由来する地名が多く、シシャモカムイノミといった鶴川独特のアイヌ文化もあります。

一方で度重なる洪水が発生し、災害の脅威から地域の安全を確保することが必要となっております。

そこで、安全・安心、自然豊かで魅力あふれる鶴川を未来へ引き継ぐために、NPO、市民団体、住民、関係機関、河川管理者で構成する鶴川・ピリカ・プロジェクトを設立し、未来へ向けた川づくりについて議論を重ねてきました。

わたしたち、鶴川・ピリカ・プロジェクトは、こうした理念のもと、「美しい川の宣言」をとりまとめましたので、ここに宣言します。

この宣言は、未来へ引き継ぐ鶴川の姿を思い描き、その目標として作成したものであります。

今後は、この宣言に盛り込んだ自然と魅力あふれる鶴川の実現を目指し、流域住民が力を合わせて行動していきたいと考えております。

また、この宣言が地域の活性化を促し、さまざまな方面で具体的な活動へと展開していくことを期待いたします。

2009 年 3 月

鶴川・ピリカ・プロジェクト委員一同

「ピリカ」とは、アイヌ語で「美しい、良い」などを意味する言葉です。

1 級河川鶴川 美しい川の宣言

鶴川・ピリカ・プロジェクト

1 . 鶴川・ピリカ・プロジェクトの歩み

1-1 設立

1-2 委員名簿

1-3 プロジェクトの経過

1

2

3

2 . 美しい川の宣言

3 . 行動計画

参考資料

- ・ニュースレター
- ・鶴川流域の概要
- ・グラビア

1. 鶴川・ピリカ・プロジェクトの歩み

1-1 設立

武鳥 川・ピリカ・プロジェクトは平成 19 年 3 月 8 日に鶴川流域懇談会（仮称）として、NPO、市民団体、住民、関係機関、河川管理者の 19 名の委員により発足しました。

翌年には占冠村より 1 名の委員が参加し、現在は 20 名の委員により構成されています。

平成 19 年 3 月 8 日に開催された鶴川流域懇談会（仮称）で、会の名称を鶴川・ピリカ・プロジェクト～美しい川をめざして～と命名しました。

ここで、「ピリカ」とはアイヌ語で「美しい、良い」などを意味する言葉で、未来に美しい、良い鶴川を継承していきたいという想いを込めています。

また、会の内容を流域内外に、より知っていただくため、「～美しい川をめざして～」という副題をつけました。

鶴川・ピリカ・プロジェクトの設立趣旨は以下のようになっております。

鶴川・ピリカ・プロジェクト

～美しい川をめざして～

設 立 趣 旨

鶴川は、上流の占冠村から中下流のむかわ町（旧穂別町、旧鶴川町）の、山間渓谷や河川沿いの農地・市街地を流れ下り、太平洋にそそぐ日本有数の清流で、その名はアイヌ語の「ムカ・ペツ（河口が塞がる川）」に由来しています。

流域では、シシャモやシギ・チドリなどが生息・生育し多様な生態系が形成されており、その自然の豊かさを背景として農林水産・観光業が基幹産業として営まれています。またアイヌの継承地、太古の化石の出土地としても知られています。

鶴川の川づくりは、度重なる洪水の脅威から地域の安全を確保し発展を支えるため、昭和 26 年より本格的な治水事業が行われてきました。また経済活動等の影響から生物の生息・生育環境を保全するため、住民や行政などにより干潟保全や森林植樹など環境保全の取り組みなども行われてきました。

一方で近年、地球規模の自然環境の変化と災害の発生が懸念される中、鶴川流域においても平成 4 年、平成 15 年、平成 18 年などに見られる洪水災害の頻発や自然環境の変化の進行、加えて地域の防災意識や川への関心の低下に起因した被害や影響の拡大が懸念されています。

このような状況に対しては、流域の視点から、住民や行政などが、鶴川の現状と課題及び将来について話し合い、意見を共有し、協働の川づくりを行うことが必要と考えます。歴史・文化を尊重した、自然豊かな安全・安心の川づくりを行い、未来へ魅力あふれる鶴川を引き継ぐため、鶴川・ピリカ・プロジェクトを設立します。

1-2 委員名簿

武川・ピリカ・プロジェクトには、20名が委員として参加し、座長の小坂利政、副座長の相田準一を中心に議論を重ねてきました。

異動により委員の変更がありまして、これまで27名が委員として参加しています。

表 1-1 鶴川・ピリカ・プロジェクト委員一覧

	氏名	所属	在籍期間(平成)		
			18	19	20
座長	小坂 利政	むかわ町一級河川鶴川愛護協議会			
副座長	相田 準一	NPO 法人鶴川・沙流川交流会			
	飯岡 孝一	むかわ・森・川・海を守り隊			
	小山内 恵子	ネイチャー研究会 in むかわ			
	中井 弘	むかわ柳葉魚を語る会			
	押野 朱美	鶴川アイヌ文化伝承保存会			
	押野 里架	鶴川アイヌ文化伝承保存会			
	齊藤 裕子	むかわ町立生田小学校			
	富樫 生志	むかわ町立生田小学校			
	藤田 栄	北海道穂別高等学校			
	松澤 正枝	北海道穂別高等学校			
	石田 節子	鶴川地域協議会			
	鎌田 政博	穂別地域協議会			
	北原 聡夫	鶴川町商工会青年部			
	大江 孝英	鶴川町商工会青年部			
	観音 肇	占冠村観光協会			
	豊岡 義博	穂別苫小牧森林組合			
	小林 敏哉	苫小牧広域森林組合			
	五十嵐 順一	胆振東部消防組合消防署鶴川支署			
	松並 政一	胆振東部消防組合消防署穂別支署			
	松田 順一	胆振東部消防組合消防署穂別支署			
	岡田 信一	むかわ町企画課			
	松永 真理	占冠村総務課			
	首藤 敏	室蘭土木現業所苫小牧出張所			
	棚池 裕治	室蘭土木現業所苫小牧出張所			
	菅原 秀紀	室蘭開発建設部苫小牧河川事務所			
	巖倉 啓子	室蘭開発建設部苫小牧河川事務所			

1-3 プロジェクトの経過

武鳥 川・ピリカ・プロジェクトは平成 19 年 3 月 8 日に発足以降、平成 21 年 3 月までに計 11 回の会議を開催し、未来に継承していく鶴川の姿について話し合いを重ねました。

「知る (Know)」

第 2 回ワークショップでは「過去から現在までの鶴川の情報」、「鶴川への想い」について意見出しを実施しました。出された意見を「防災」、「環境」、「教育・文化」、「観光」の 4 つのカテゴリーに分類し、今後はカテゴリー別に議論を行うこととしました。

第 3 回現地調査会では鶴川河口から源流までを視察し、流域の情報共有を行い、第 4、6、7 回の講師による講演を通して、それぞれのカテゴリーに対する知識を深めました。

「考える (Think)」

第 8 回ワークショップでは「防災」、「環境」、「教育・文化」、「観光」のカテゴリーに対して、未来へ引き継ぐ鶴川の目標を考えました。

「想う (Image)」

第 9 回はアクションプランの体験を行い、干潟観察会に参加して、渡り鳥の観察や干潟に生息するゴカイを子供達と調査することにより、干潟の大切さを実感しました。

第 10、11 回ワークショップで未来へ継承していく鶴川の姿を思い描きながら、全体目標及び美しい川の宣言(案)を作成しました。

なお、美しい川の宣言(案)は、流域住民の意見を取り入れて「美しい川の宣言」としました。

「動く (Action)」

平成 21 年度以降は美しい鶴川に向けて実際に行動していきます。

また、実際に行われた行動(アクションプラン)に対して評価及び行動計画の見直しを随時行っていきます。



第 3 回現地調査会



第 9 回干潟観察会

表 1-2 鶴川・ピリカ・プロジェクトの経過

過程	会議	議題	分類
発足	第1回(H19.3.8)	・鶴川・ピリカ・プロジェクト設立	設立
知る (Know) 	第2回(H19.3.22)	・ワークショップ 「過去から現在の鶴川の情報」 「鶴川への想い」	全分野
	第3回(H19.7.14)	・現地調査会 鶴川の河口から源流まで	現地
	第4回(H19.10.25)	・鶴川・ピリカ・プロジェクト講演会 室蘭工業大学 教授 藤間 聡氏 「ハザードマップの作成～室蘭市コイカクシ川の事例～」 ・ワークショップ(防災) 「災害を未然に防ぐには」 「万が一災害が発生したら」	防災
	第5回(H19.12.4)	・ワークショップ(防災) 「避難前の課題と取組み」 「避難時の課題と取組み」	防災
	第6回(H20.2.23)	1 鶴川・ピリカ・プロジェクト講演会 流域生態研究所 所長 妹尾 優二氏 北海道環境財団 理事長 辻井 達一氏 2 ワークショップ(環境) 「鶴川の川づくりに向けて」	環境
	第7回(H20.3.25)	3 鶴川・ピリカ・プロジェクト講演会 NPO 法人ねおす 専務理事 宮本 英樹氏 社団法人北海道ウタリ協会胆振地区連合会副会長 片山 幹雄氏 4 ワークショップ(教育文化、観光) 「鶴川の川づくりに向けて」	教育・文化
			観光
考える (Think) 	第8回(H20.8.6)	5 ワークショップ 「目標に入れる言葉の抽出」 「ベースマップ作成」	全分野
思う (Image) 	第9回(H20.9.13)	6 アクションプログラムの体験 「ネイチャー研究会 in むかわ 干潟のピクニック」	現地
	第10回(H20.11.18)	7 ワークショップ 「目標づくり」 「アクションプログラムについて」	全分野
	第11回(H . . .)	8 ワークショップ 「目標づくり」 「アクションプログラムについて」	全分野

動く

(Action)



アクションプランへ

2. 美しい川の宣言

全体目標（テーマ）

防災の目標：

安全・安心な鶴川

目標 1（情報の伝達）：

防災情報が行き届く鶴川

目標 2（避難）：

災害をよく知り、ともに助け合う鶴川

目標 3（防災対策）：

災害に強い人づくり・川づくり

Safety & Peaceful Field

環境の目標：

母なる清流鶴川

目標 1（水環境）：

命を育む日本一の清流

目標 2（生態系）：

人も生き物も育つ川

目標 3（景観）：

四季折々の美しさを実感できる川

目標 4（川づくり）：

人の想いがつながる川づくり

Mother's River

教育・文化の目標：

アイヌ精神と川育が はぐくむ鶴川

目標 1（アイヌ文化）：

アイヌ民族の精神文化を共有し未来に伝承される川

目標 2（教育）：

自然・文化・歴史を体験し学ぶ川育

Ainu Spirits & River Education

観光の目標：

ようこそ！本物の自然 を体験できる鶴川へ

目標 1（観光資源）：

ありのままの鶴川こそ観光資源

目標 2（観光戦略）：

豊かな自然を体験できる鶴川観光

Welcome to the Naked Natures

防災

防災の目標：安全・安心な鶴川

目標 1（情報の伝達）：防災情報が行き届く鶴川

関係機関は災害の予測や状況を共有して、適切な判断を行い、**正確な情報を住民へ迅速に提供できる体制をつくります。**

住民への伝達は防災行政無線などのあらゆる情報伝達手段を用いて、全住民へ伝達できるように努めます。

地域では自主防災組織を結成して、地域ネットワークを構築し、日頃の防災意識の向上や高齢者などの要支援者の把握と地域連携の体制を整えます。災害時には自主防災組織が中心となって、関係機関と地域の情報を共有するための懸け橋となります。

防災の目標：安全・安心な鶴川

目標 2（避難）：災害をよく知り、ともに助け合う鶴川

過去に災害が発生した時の降雨や河川水位状況と被災した地区とその状況といった過去の災害事例の教訓を活かし、日頃から地域における危険箇所、避難経路、避難場所の把握といった防災訓練を行います。

過去の事例から災害の発生が予想される場合には、**自主防災組織**が中心となって地域内で共に助け合いながら自主的に避難するなど、人命が最優先という意識をもって行動します。

防災

防災の目標：安全・安心な鶴川

目標 3（防災対策）：災害に強い人づくり・川づくり

地球温暖化の影響により、今後集中豪雨が多発し、災害リスクが増大することが予想されています。

そこで、河川整備などのハード的対策と防災教育などのソフト的な対策を並行して実施する必要があります。

ハード的な対策として、**鶴川の良好な自然環境に配慮しながら災害に強い川づくりを実施し、災害リスクの軽減に努めます。**

ソフト的な対策として、内水氾濫にも対応したハザードマップの整備と活用、子供への防災教育により将来の地域リーダーを育成、防災訓練の実施、日頃の情報共有など、行政が中心となって防災体制の構築に努めます。

環境の目標：母なる清流鶴川

目標 1（水環境）：命を育む日本一の清流

鶴川は 1 級河川水質ランキングで全国 1 位（平成 17、18 年）にランキングするような全国でも有数の清流です。

この清流鶴川はシシャモ、サケ、米、野菜、メロン、肉牛といった鶴川流域の特産品を生み出し、人間は鶴川から恩恵を受けていますが、近年、なかなか濁りがとれない、河川水位の低下、海岸浸食による河口干潟の減少といった状況が発生しています。

そこで森・川・海を一体で守り、命を育む日本一の清流でありつづけるように流域住民が力を合わせていきます。

環境

環境の目標：母なる清流鶴川

目標 2 (生態系)：多様な生き物が生息できる川

鶴川流域には、サクラソウ、カタクリ、ミズバショウなどの植物、シヤマモ、サケなどの魚類、オジロワシ、オオワシなどの鳥類、ニホンザリガニ、エゾサンショウウオなど多様な生き物が生息しています。

また、鶴川河口には人工干潟があり、シギ、チドリなどの渡り鳥の中継地として重要な役割を果たしています。

このような多様な生き物が生息できる川を人の手により保全し、生き物と触れあう感動を子供達へ伝えていきます。

環境の目標：母なる清流鶴川

目標3（景観）：四季折々の美しさを実感できる川

鶴川流域は、エゾヤマザクラ、タンポポ、新緑の森や田園、あざやかな紅葉、樹氷やダイヤモンドダストなど色とりどりの四季の姿があり、鶴川の青き水の流れの中で美しい景観を呈しています。

そのような四季折々の景観は、心の安らぎと感動を与えるものです。

そこで、四季折々の美しさを実感できる鶴川の永久^{とわ}の流れを自然のままに保全していきます。

さらには、鶴川はシシャモ伝説が生まれたところなので、河川敷にはいっぱい柳の木や、豊かな自然の中で子供達が無邪気に遊ぶ姿を見ることができる鶴川としていきます。

環境

環境の目標：母なる清流鶴川

目標 4（川づくり）：人と自然が共生できる川づくり

鶴川には清流の恵みを得て、様々な生物が生息し、シシャモといった地域を代表する特産品もあります。

一方で過去に大きな災害に見舞われ、今後の洪水被害をなくすために河川整備を必要としています。

今後の川づくりを行うに当たっては、洪水被害を軽減することはもとより、ふるさとの川を実感でき、子供、恋人、お年寄りが手と手をつないで歩けるような川、人間と自然が共生できることを目指し、人の川への想いを未来までつなげる川づくりに努めます。

教育・文化の目標：

アイヌ精神と川育がはぐくむ鶴川

目標1（教育）：自然・文化・歴史を川から学ぶ川育

鶴川には、渡舟場、流送といった歴史や、川と密接に関わったアイヌ文化、多様な生態系を有する豊かな自然など、子供達の学習素材が豊富にあります。

子供達が、このような素材と触れあい、実際に体験することで、鶴川流域のすばらしさを実感でき、自然、文化、歴史を保全や伝承していくための良い経験となります。

その経験は将来の鶴川を形成していくために、かけがいのないものになるのではないかと考えます。

そこで、**子供達が自然、文化、歴史などを川から学ぶ「川育」の推進に努めていきます。**

教育・文化の目標： アイヌ精神と川育がはぐくむ鶴川

目標2（アイヌ文化）：

アイヌ民族の精神文化を共有し未来に伝承される川

鶴川流域にも、アイヌ語にまつわる地名やシシャモカムイノミといった川と密接にかかわった鶴川特有のアイヌ文化があります。

このような鶴川特有のアイヌ文化を子供の体験活動や交流活動をとおして、流域全体で共有し、**アイヌ民族の精神文化と誇りを次世代へ伝承していくことに努めます。**

観光の目標：

ようこそ！本物の自然を体験できる鶴川へ

目標 1（観光資源）：ありのままの鶴川こそ観光資源

清流鶴川には、渡り鳥の中継地である河口干潟、黄色いじゅうたんのたんぽぽ群生地、紅葉がすばらしい福山溪谷、赤や青の巨石おりなす赤岩青巖峡の景勝地、美しい溪流の源流など豊富な自然環境とシシャモなどの豊かな生態系、シシャモカムイノミなどのアイヌ文化、カヌーやラフティングの自然体験など様々な観光資源があります。

このような鶴川の魅力を伝えることができる人材も観光のための重要な資源であります。

ありのままの鶴川こそ観光資源であると考え、鶴川の魅力を流域住民が共有し、流域がひとつになって、この観光資源を守っていきます。

また、観光の人材を育成し、鶴川の魅力をより多くの人たちに知ってもらえるように努めます。

観光

観光の目標：

ようこそ！本物の自然を体験できる鵜川へ

目標 2（観光戦略）：豊かな自然を体験できる鵜川観光

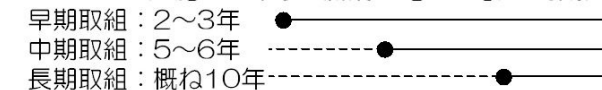
清流鵜川のすばらしさを流域内外の人に知ってもらうために、鵜川流域の自然や産業を活かした体験型の観光を推し進めます。

鵜川の観光資源である清流や豊かな自然、食材、文化を前面に押し出し、カヌーやラフティングなどをおして、**子供たちが豊かな自然を体験できる鵜川の観光を目指します。**

3. 行動計画

●鶴川・ピリカ・プロジェクト 美しい川宣言とアクションプラン

※アクションプラン実施のめやす（点線は思い・計画時期）



テーマ	目標		解説	アクションプラン	具体例	早期取組	中期	長期	
観光	ようこそ！本物の自然を体験できる鶴川へ	観光資源	ありのままの鶴川こそ観光資源	清流鶴川には、渡り鳥の中継地である河口干潟、黄色いじゅうたんのたんぼほ群生地、紅葉がすばらしい福山溪谷、赤や青の巨石おりなす赤岩青巖の景勝地、美しい溪流の源流など豊富な自然環境とシシャモなどの豊かな生態系、シシャモカムイノミなどのアイヌ文化、カヌーやラフティングの自然体験など様々な観光資源があります。このような鶴川の魅力を伝えることができる人材も観光のための重要な資源です。ありのままの鶴川こそ観光資源であると考え、鶴川の魅力を流域住民が共有し、流域がひとつになって、この観光資源を守っていきます。また、観光の人材を育成し、鶴川の魅力をより多くの人たちにとってもらえるように努めます。	・観光資源の発掘	・鶴川遺産の認定（集計ランキング）			
		観光戦略	豊かな自然を体験できる鶴川観光	清流鶴川のすばらしさを流域内外の人にとってもらうために、鶴川流域の自然や産業を活かした体験型の観光を推し進めます。鶴川の観光資源である清流や豊かな自然、食材、文化を前面に押し出し、カヌーやラフティングなどをとおして、子供たちが豊かな自然を体験できる鶴川の観光を目指します。	・体験型観光ツアーの企画	・鶴川日帰り観光ルートの企画	●		
教育文化	アイヌ精神と川育がはぐくむ鶴川	教育	自然・文化・歴史を川から学ぶ川育	鶴川には、渡舟場、流送といった歴史や、川と密接に関わったアイヌ文化、多様な生態系を有する豊かな自然など、子供達の学習素材が豊富にあります。子供達が、このような素材と触れあい、実際に体験することで、鶴川流域のすばらしさを実感でき、自然、文化、歴史を保全や伝承していくための良い経験となります。その経験は将来の鶴川を形成していくために、かけがいのないものになるのではないかと考えます。そこで、子供達が自然、文化、歴史などを川から学ぶ「川育」の推進に努めていきます。	・川育の学習プログラム	・「親子の川探検」の開催	●		
		アイヌ文化	アイヌ民族の精神文化を共有し未来に伝承される川	鶴川流域にも、アイヌ語にまつわる地名やシシャモカムイノミといった川と密接にかかわった鶴川特有のアイヌ文化があります。このような鶴川特有のアイヌ文化を子供の体験活動や交流活動をおとて、流域全体で共有し、アイヌ民族の精神文化と語りや次世代へ伝承していくことに努めます。	・アイヌ文化体験	・身近なアイヌ語探索講座の開催	●		
環境	母なる清流鶴川	水環境	命を育む日本一の清流	鶴川は1級河川水質ランキングで全国1位（平成17、18年）にランキングするような全国でも有数の清流です。この清流鶴川はシシャモ、サケ、米、野菜、メロン、肉牛といった鶴川流域の特産品を生み出し、人間は鶴川から恩恵を受けていますが、近年、なかなか濁りがとれない、河川水位の低下、海岸浸食による河口干潟の減少といった状況が発生しています。そこで森・川・海を一体で守り、命を育む日本一の清流でありつづけるように流域住民が力を合わせていきます。	・清流の保全	・河川清掃の実施	●		
		生態系	多様な生き物が生息できる川	鶴川流域には、サクラソウ、カタクリ、ミズバショウなどの植物、シシャモ、サケなどの魚類、オジロワシ、オオワシなどの鳥類、ニホンザリガニ、エゾサンショウウオなど多様な生き物が生息しています。また、鶴川河口には人工干潟があり、シギ、チドリなどの渡り鳥の中継地として重要な役割を果たしています。このような多様な生き物が生息できる川を人の手により保全し、生き物と触れあう感動を子供達へ伝えていきます。	・生態系の保全	・鶴川の生物生息マップ作り	●		
		景観	四季折々の美しさを実感できる川	鶴川流域は、エゾヤマザクラ、タンポポ、新緑の森や田圃、あざやかな紅葉、樹氷やダイヤモンドダストなど色とりどりの四季の姿があり、鶴川の青き水の流れの中で美しい景観を呈しています。そのような四季折々の景観は、心の安らぎと感動を与えるものです。そこで、四季折々の美しさを堪能できる鶴川の永久にわの流を自然のままに保全していきます。さらには、鶴川はシシャモ伝説が生まれたところなので、河川敷にはいっぱい柳の木や、豊かな自然の中で子供達が無邪気に遊ぶ姿を見ることができるとして鶴川としていきます。	・美しい景観の保全	・河川清掃の実施	●		
		川づくり方針	人と自然が共生できる川づくり	鶴川には清流の恵みを得て、様々な生物が生息し、シシャモといった地域を代表する特産品もあります。一方で過去に大きな災害に見舞われ、今後の洪水被害をなくすために河川整備を必要としています。今後の川づくりを行うに当たっては、洪水被害を軽減することはもとより、ふるさとを愛する川を愛する、子供、若人、お年寄りが手と手をつないで歩けるような川、人間と自然が共生できることを目指し、人の川への想いを未来までつなげる川づくりに努めます。	・自然に配慮した川づくり	・福祉、癒しの川づくり検討会			●
防災	安全・安心な鶴川	情報の伝達	防災情報が行き届く鶴川	関係機関は災害の予測や状況を共有して、適切な判断を行い、正確な情報を住民へ迅速に提供できる体制をつくります。住民への伝達は防災行政無線などのあらゆる情報伝達手段を用いて、全住民へ伝達できるように努めます。地域では自主防災組織を結成して、地域ネットワークを構築し、日頃の防災意識の向上や高齢者などの要支援者の把握と地域連携の体制を整えます。災害時には自主防災組織が中心となって、関係機関と地域の情報を共有するための駆け橋となります。	・情報の共有化	・災害時ご近所連絡網の整備		●	
		避難	災害をよく知り、ともに助け合う鶴川	過去に災害が発生した時の降雨や河川水位状況と被災した地区とその状況といった過去の災害事例の教訓を活かし、日頃から地域における危険箇所、避難経路、避難場所の把握といった防災訓練を行います。過去の事例から災害の発生が予想される場合には、自主防災組織が中心となって地域内で共に助け合いながら自主的に避難するなど、人命が最優先という意識をもって行動します。	・人命が最優先	・日頃から備える地域防災講習会	●		
		防災対策	災害に強い人づくり・川づくり	地球温暖化の影響により、今後集中豪雨が多発し、災害リスクが増大することが予想されています。そこで、河川整備などのハード的対策と防災教育などのソフト的対策を並行して実施する必要があります。ハード的な対策として、鶴川の良好な自然環境に配慮しながら災害に強い川づくりを実施し、災害リスクの軽減に努めます。ソフト的な対策として、内水氾濫にも対応したハザードマップの整備と活用、子供への防災教育により将来の地域リーダーを育成、防災訓練の実施、日頃の情報共有など、行政が中心となって防災体制の構築に努めます。	・防災教育の実施	・避難所運営体験会（炊き出しの体験）		●	